



僕は木村監督とは初めての仕事ですが、「写真で決めた。都会的な顔はいらなから」と言われました。(笑)

鶴次郎という人夫の役では、測量の仕事というものが全くわからないので、待つ時間が長く、何でもそんなに時間がかかるんだと不満を訴えるシーンが最初にあります。でも、いろいろなことがありつつも最終的には測量隊の皆の気持ちの一つになっていく。このあたりの流れは、スタッフ、俳優たち全員に生まれてきた感情と重なっていたと思います。この作品で一緒になった皆さんは一生忘れません。

また、あれだけの人数をまとめた監督はすごいと思います。俳優を危ないような場所に立たせるときは、自分はずっと危ない場所に

立つんですよ。そこまでやらないと気が済まないんでしょうね。

もともと僕は、すごい恥ずかしがり屋で、人前で何かするような子どもじゃなかった。ただ映画が好きで、忙しい父と唯一接点を持てるのも映画でした。父が亡くなり、これからどうしようかなとなったとき、お誘いがあって俳優の道に進みました。

今回は雪崩のシーンがありましたが、僕は正直、本当にこわかった。雪の塊が重く厚く自分の上に乗るともう動けないんですよ。あの孤独感！1分1秒が永遠のように長く感じました。この映画は、携帯もない時代の話ですよ。そういった世界に浸ったことで、本には書かれていないいろいろなことを、自分の体で丸ごと感じました。そう感じたことが映画で伝わればいいのですが。伝わるでしょうか？

仁科 貴 にしなたかし

1970年8月、京都生まれ。俳優(故)川谷拓三氏の長男。出演作品：映画「埋もれ木」「血と骨」「監督・ばんざい」「アキレスと亀」「呉清源」、テレビ「オードリー」他